

グッピーの繁殖行動における捕食者の影響

砂原 翔・古澤 知也・岩佐 美月

1 Motive・Purpose

- 先輩がされていたグッピーの求愛行動について興味を持った。
- 小型の肉食魚でも求愛行動に変化が見られるのかを調べる。

2 Hypothesis

オヤニラミがない時に比べて、オヤニラミがいるときは求愛行動をする時間が短くなる。

オヤニラミと水を共有しているかどうか、オヤニラミを視認できるかどうかによって求愛行動に変化がみられる。

3 Experiment method

グッピーのつがい水槽に入れ、求愛行動がどのようなものなのかを調べる。オヤニラミをグッピーの反対側に入れ、グッピーがオヤニラミをどのように認識しているのかを知るために、2種類の仕切りと2つの水槽を用いてオヤニラミの有無、オヤニラミと水を共有しているかどうか、オヤニラミを視認できるかどうかにおいて、8パターンに分けて対照実験を行う。その様子を正面からビデオカメラで30分間撮影し、撮影した映像をもとに求愛行動の時間を測る。

実験の様子



オヤニラミ

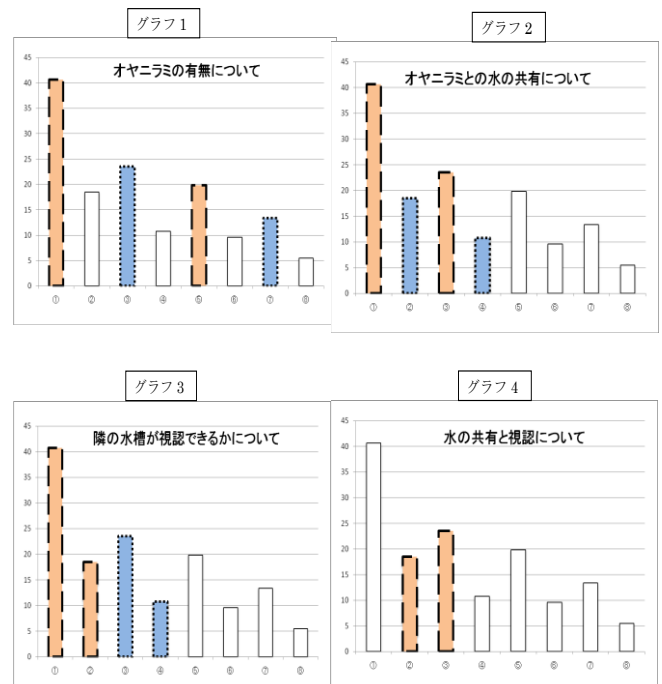
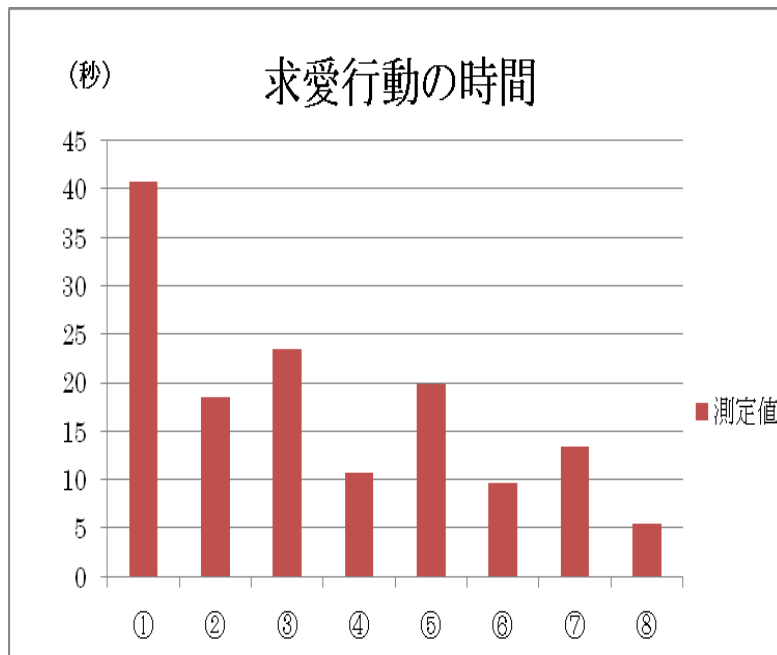


	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
オヤニラミ	○	○	○	○	×	×	×	×
水を共有	○	○	×	×	○	○	×	×
隣の水槽が視認できる	○	×	○	×	○	×	○	×

○：(オヤニラミ→有、水を共有→している、隣の水槽が視認できる→できる)

×：(オヤニラミ→無、水を共有→していない、隣の水槽が視認できる→できない)

4 Result



5 Consideration

仮説とは異なり、

オヤニラミがいること、水を共有していること、視認できること

それぞれで求愛行動は活発になる。

オヤニラミと水を共有していることよりもオヤニラミを視認できることの方が求愛行動を活発になる。